
ドラえもん のび太のバイオハザード

毒物

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラえもん のび太のバイオハザード

【Nコード】

N33710

【作者名】

毒物

【あらすじ】

僕達は夏休みの初日にドラえもんにとある無人島へ連れて行ってもらった。誰にも邪魔されず好きなことをやって思う存分バカンスを楽しんだ。そして、帰宅の日……。三日も見ていない家族の顔が見れると思うとなんだかうれしい気分になる。だけど、待っていたのは悪夢だった。

序章 怪始（前書き）

パソコン用のフリーゲーム、のび太のバイオハザードがあまりにも素晴らしかったため思わず書いてしまいました。駄文で真に恐縮ですが是非読んで戴けると嬉しいです。なおストーリーに関してはかなりオリジナルを加えるため攻略などにはならないと思います。が、設定自体はそのままのためネタバレは止めて欲しいという方はご遠慮下さい。

序章 怪始

僕達は夏休みの初日にドラえもんにとある無人島へ連れて行ってもらった。誰にも邪魔されず好きなことをやって思う存分バカンスを楽しんだ。そして、帰宅の日・・・。

「ああ、楽しかった!」

「本当本当。他の観光客なんかいないから、毎年行ってるハワイより楽しめたよ。」

ボカツ

「痛つつつあああ!何すんだよ、ジャイアン!」

「むかつくこと言いやがって、俺なんかあ夏休みなんてずっと店番させられてんだぞ!それなのにてめえ!」

僕とスネ夫、ジャイアン、そして静香ちゃんのいつもの面々の間に他愛もない会話が流れる。まだまだみんなバカンスの興奮が抜けていないようだった。もちろん僕だってそうだ。こんなに楽しい事は久しぶりだったから。

「みんな、忘れ物はない?のび太君、じゃあボクはこれからみんなを家に送ってくるから」

最後に僕の部屋に戻ってきたドラえもんが早々とそう言った。もう少し、話していたかったんだけどみんなも家族に早く会いたいらしい。名残惜しいけどまた明日会えるし、今日はもう解散かな。

「じゃあね!みんな」

「のび太さん、また明日」

「明日は野球の特訓だからな!忘れんなよ!」

「忘れんなよ!」

「うん、分かってるよ」

どこでもドアが閉じてみんなの姿が消える。ドラえもんはしばらく戻らないだろう。僕だけでも先に挨拶してこよう。

僕は勢いよく階段を駆け下りた。いつもなら転げ落ちるはずなのに

今日はどうも足取りが軽い。僕はなんとなくまざくことすらなく、一階に降り立った。

さあ、ママとパパのいる部屋は目の前だ。いつもは五月蠅いと思っているけどさすがにしばらく会わないと寂しくなる。だから思いつき「ただいま！」って言うんだ。二人ともびっくりするかな？

ガラガラ

目の中に眩しいくらいの光が差し込んできた。それは後から思い返してみれば悪夢の事件の幕開けの合図であつたのであろうか。なんにせよ、その部屋に「パパ」と「ママ」はいなかつたのだから。

「パパ！ママ！ただい……つつつ！？」

これは夢なのだろうか。いや違う、現実だ。パパとママが僕をからかっているのかな？ いや違う、のび太現実を見るんだ。嘘だ嘘だ嘘だ。こんなことあるわけない。でも目の前で現に起きている。

床に転がるハパの頭部。体を失い無機質な目で僕を見ている。そしてその隣にはその体を抱くママの姿があった。抱く？ただ抱いているだけではない。時折聞こえるむしゃむしゃという音。食べているのだ！ハパの死体を。

「あ……ああ……」

吐き気とシヨック、そして現状を飲み込めきれないで僕は思わず声を漏らしてしまった。その音に敏感に反応し「ママ」がパパの死体を投げ捨てこちらに振り返る。腐りきり顔の一部が欠け、片目がつぶれながらも平然と動くその異形の姿で。

「うわあああああああああああああ
あああああああ！」

気づいていたら体が動いていた。襲いかかってきた「そいつ」の腹を思いつき蹴飛ばして距離をとる。と、同時にパパの手に握られていた包丁を奪い握りしめた。火事場の馬鹿力とはこのことを言う

のであろう。学校での運動音痴が嘘のように治り奴に捕まらないようにしながら何度も斬りつけていく。しかしいくら刺しても動きを止めない。心臓などとうに貫いているはずなのに。でも今はこれしかない。この武器で戦うしかないんだ。左足を払いさらに首へと追いつ打ちを掛ける。・・・よし、ビンゴ！初めて悲痛そうな叫びをあげたぞ。首が弱点なんだ。こいつはもう人間じゃない。ママじゃないんだ。死ね死ね死ね死ね死ね・・・死・・・ね

「・・・・・・・・」

どれほどの時が流れただろうか。随分と長い時間立ち尽くしているような気がする。僕は正しいことをした。刺さなければ僕が殺されていた。なのに何故だろう。

足下に横たわるママ。無数の刺し傷の果てに僅かに残る、よく怒られたけどそれでも大好きだったその面影。それを見る度に涙が止めどなく溢れてくる。

バリン！

窓が割られてゆっくりと他の奴らが入ってくる。ママだけじゃなかったんだ。ああなったのは。なんと刺しても死なずゆっくりとした動きで人間を襲う。その姿はゾンビとしかいうほかないだろう。さつきまでなら、叫んでいただろうけどもう驚かない。いや、驚く心の隙間すらなかった。でも逃げなきゃいけない。こんなことをしてまで生き延びたんだ。こんなところで死んで良いはずがない。だから最後に一つだけ。一つだけパパとママを見据えてこういった。

「ただいま！」

僕は思いきり駆け出した。体が軽い。背後に感じた化け物の腐臭はあつという間に遠ざかり見慣れた玄関を乱雑に開けて一気に突き抜ける。涙はいつの間にか止まりただ赤々と僕の頬にソレを流した跡だけが刻まれていた。

序章 怪始（後書き）

のび太・・・なんか強くしすぎた感があります。

第一章 地獄絵図

外は予想を遙かに絶する悲惨な場所と化していた。コンクリートの上に転がる恐怖で顔を歪めた人々の死体。そしてそれらを貪り、這いずり回る生ける屍達。馬鹿な僕でも頭を使わなくては生き残れないと容易に分かった。

まずは、どうすればいい？隠れる場所を探す？武器を探す？いや、それよりもまずみんなと合流した方がいい。この辺りで、皆が行きそうな場所。そしてまだ、隠れることが出来そうな場所・・・といえば

「あそこしかないか」

いつもはあんまり行きたくないけれどこれ以上の場所はないだろう。僕は近寄ってくるゾンビ共など目もくれず再び走り出した。生き残るための希望・・・学校へ。

・・・といったものの。

想像以上にきつい。なんせ町中ゾンビがうようよしているんだもの。突破は出来そうにないし。かといって回り道をしていては危険が増えるだけだ。というか、そんな漫画じゃあるまいし。小学生が一人で生き残れる状態じゃないだろ。ドラえもんもないし。

「う・・・う・・・」

って、考える時間もくれないみたいだ。

目の前から迫ってくるゾンビ。ジャイアンに追われている時以上の猛スピードで僕は一気に振り切った。さてと、このままじゃろくに考えられもしない。とりあえず手近なスーパーの中に入ろう。せめてなんか武器になるものがあればいいんだけど・・・

「誰！そこにいるのは！」

「うわ！」

僕が店内に入った瞬間だった。突くような鋭い声が店の奥から聞こえてきたのは。思わず尻もちをついてしまった自分が情けない。でもよかった。まだ生きている人が居るんだ。

「僕は、生きているよ。奴らから逃げてきたんだ。君は・・・」

「近寄らないで！生きていても奴らにかまれたりひつかかれたりしたら、もうダメなの。ゾンビになってしまう。私は何度もそれを見てきた」

「大丈夫だよ。僕は一度も奴らに触れてないもん」

「お願いだから。近寄らないで。」

僕の言葉には耳も貸さず悲痛めいた叫びだけが飛んでくる。よっぽど怖い目にあっただろう。家族がゾンビになって襲ってくるんだもんなあ。精神が過剰に警戒的になってもおかしくない。あれ？そういえば、この声・・・どこかで聞き覚えが・・・

「あの、聖奈さんですか？」

「えっ？」

やっぱりそうだ。うちの学校の六年生で生徒会長の聖奈さん。美人で優しく生徒全員から大人気な人だ。

「僕、野比です。五年の野比のび太です」

「野比君？ああ、あのいつも遅刻ばかりしている。ごめんなさい。いきなり叫んで。こっちに来て良いわよ」

少し気になるセリフを聞いた気がするが気のせいだろう。僕は店の奥へと足を進めていた。薄暗いライトに徐々に照らされ段々と、その姿が見えてくる。

「初めまして。聖奈です。」

綺麗。それが彼女を見て真っ先に浮かんだ言葉だった。整った顔立ちにミドルの黒髪をカチューシャでおさえた姿にはそれ以外の言葉は必要ないだろう。しかし、その感想は彼女の手元を見た瞬間に一気に吹き飛んでしまった。怪我とかそういう理由じゃない。そこには白銀に輝く一丁のピストルが握られていたのだ。

「初め・・・まして。あの、聖奈さん。それは」

僕の思わず震えてしまった声とは対照的に、彼女はあっさりと答えた。

「ああ、これ？さっき警官の死体からとったものよ。まだ上手く使えないんだけど。野比君はもってないの？今じゃ常識だよ」

「うん・・・まだね。」

どんな常識だよ！思わず心の中で突っ込んでしまった。この世界がこんなになってまだ1時間くらいしかたっていないはずなのに随分と日本は崩壊してしまったようだ。

「それにしても、野比君はこれからどうするつもりなの？」

「ああ、みんながいるかもしれないから学校に向かおうと思う。

ドラえもんに会えば絶対何とかしてくれるから」

「ドラえもん？」

しまった！聖奈さんは一度も会ったことないんだ。というか話したのもこれが初めてだし。

「え〜と、信じられないかも知れないけどまあロボットだよ。どんなことでも出来る万能な。とにかくドラえもんに出会えば助かることができるはずだよ。そうだ！聖奈さんも一緒に来てくれる？どの道もゾンビだらけで全然進めないんだ」

「えっ、でもそんな銃はあと弾が五発しかないわ。私の腕じゃ、そのうち一発当たるくら・・・野比君！伏せて！」

「えっ！？」

突然の聖奈さんの指示に反射的に体を縮めた。その直後窓ガラスが割られ、何かが入り込んでくる。

ゾンビ？違う。もっと小さいけれど速い・・・あれは犬？

それは犬のゾンビともいうべきか。腐り落ちた体を震わせながらすさまじいスピードで接近してくる。

「うわっ！」

よけてみたが速すぎる。次の攻撃には対応できない！

「野比君！」

バンッ

聖奈さんが素早くトリガーを引いた。慣れてない武器でありしかもこの小さく速い相手、あたることはなかった。しかし、意識が聖奈さんの方に向いたおかげでなんとか体勢を立て直せる。

「このっ！寄らないで！」

聖奈さんが再び発砲しようと銃を構えた。でも、間に合わない。もう目の前まで迫っている。

「いや！」

犬の牙は鋭く聖奈さんの髪を引き裂くだけで終わった。しかし、その衝撃で聖奈さんの体が壁に叩きつけられる。銃は・・・ない！落としたんだ。どこに・・・どこに・・・あ、そこだ！

「来ないで！」

「ガルルルルル」

「おい、こつちだ！」

聖奈さんの腹部の上に乗っかりとどめを刺そうとしている犬野郎に思いつきり叫んだ。もちろん、銃を構えるのは忘れないで。

「野比君！」

来る！凄い速さで床を蹴って僕の顔をめがけて飛びかかってくる！初めて使う実銃。不安はある。でも今はやるしかないんだ。やってやる。僕は射的天才なんだ。

バンッ

本日二度目に聞く発砲音。硝煙のにおいが鼻を突き刺し、長い沈黙がやってきた。僕はどうなったのだろう。痛みはない。即死させられたのだろうか。しかし、天国にいるわけではなさそうだ。とす

れば、僕は生きてる？

「ねえ、野比君・・・」

あ、生きているみたいだ。でもなんだか聖奈さん、啞然とした表情だ。僕、怪我でもしたのかな？

「銃使うの・・・本当に初めて？」

「えっ」

僕が生きていること、そして見事に弾丸が命中していたことに気がつくのは、聖奈さんのその言葉を聞き、足下に転がる死体をみた数秒後のことだった。

第二章 模索

聖奈さんと出会い約15分。彼女がルートを考え、的確な指示を出し、僕が確実に敵を仕留める。この作戦が功をなしゆつくりだが着実に学校へと向かっていった。

そして今、僕たちは学校の通りへ抜けるべく雑貨屋の大型倉庫の中にいる。

「意外と簡単だったわね」

「うん。これも聖奈さんの考えたルートのおかげだよ。でも、ここは今までで一番危険なんですよ？」

「ええ。ここの中の情報までは分からなかったから」

僕たちがルートを考えたのはあのゾンビ犬が飛び込んだスーパ―の中。いくつものパターンを考えた結果この道が安全だと判断したのだ。ただし、この倉庫を除いては。この倉庫は学校へ抜けられること以外は全く分かっていなかった。内部の状況、照明、部屋の広さ・・・しかし、他のルートはあまりにも危険すぎた。全てのゾンビが徘徊しているだろう通りを進まなければならなかったのだ。だから僕たちはこの倉庫に希望を託した。無事学校にたどり着けますようにと。

しかし、今のこの状況は予想していた中でもかなり悪いパターンだった。

「聖奈さん、どう思う？」

コツ、コツという足音に僕の声が混じる。それを聞いて彼女は警戒を崩さずに怪訝そうな顔で答えた。

「最悪ね。いままで奴らから逃げてきた分私たちの入ってきたドアの後ろには、アリの様に群がっているはずよ。つまり退路はないしかも予想より暗いわ。これじゃあ敵の位置は見えない。それに何より狭い。倉庫とは分かっていたけれどこんなに箱が積まれていた

んじゃ、いざという時身動きがとれないわ」

「そして・・・残念だけどやっぱりいるんだよね」

「ええ、奴らが」

聖奈さんのいうとおり状況はかなり悪い。ゾンビの姿は未だ見えな
いが臭いで分かる。胸を突き胃液をこみ上げさせる腐敗臭。ここに
入ってきた時から感じていた。ここには敵がいると。そしてその時
はやってきた。

コツ、コツ、コツ、コツ、くちゃ、コツ、コツ、くちゃ・・・

「聖奈さん！」

「分かってる、野比君左に飛んで！」

僕たちの足音に得たいの知れない者のそれが混じった瞬間、聖奈さ
んの鋭い指示が放たれた。僕は思いっきりジャンプし箱の上へと降
り立つ。そして、聖奈さんと打ち合わせていた作戦を実行した。

懐中電灯作戦。名前はひねりも何もないが確かに有効な作戦だ。

それは背を壁に預け、大量の懐中電灯を周囲に配置、僅かでも良好
な視界を保てる拠点をつくるというもの。下手に懐中電灯を持って
戦うよりも何倍も安全だった。

「1・・・2・・・3・・・4かな。野比君弾はあといくつある？」

「あと一発ですよ！」

「十分。一番奥の奴をお願い」

聞き終わるや否や僕は引き金を引いた。硝煙が宙を漂い一体のゾ
ンビが崩れ落ちた。正確無比なヘッドショット。やっぱり僕は射撃
の天才だ。

「えい！」

自画自賛しているといきなり聖奈さんの声が響いた。そして直後
にはドーンというもの凄い音。見ると残り三体のゾンビが箱の下敷き
になっていた。聖奈さんは奥の一体だけ僕に銃で仕留めさせ、残り
は一直線に並んだところをまとめて倒すやり方で生を勝ち取ったの
だ。

「行きましよう！」

「はい！」

ついにたどり着いた、扉。ここを開ければ学校は目の前だ。僕はドアのぶに手を掛け回した。しかしそこで違和感に気づいた。いくら回しても回りきらない・・・鍵が掛かっていたのだ。

「聖奈さん！鍵が」

「見せて！・・・大丈夫。この位の鍵なら私でも開けられるわ。ちよっと待ってて」

どこで学んだのか分からないけれど完全無欠な生徒会長さんは手早く鍵の解錠に取りかかった。

くちや

見事な手際だ。というか何のための技術なんだろう。

くちや

「時間掛かりそう？」

「ええ、あと2分くらい」

くちや

聖奈さん、それ時間掛かっているって言わないよ

くちや

・・・あれなんか変な音が聞こえる。くちや、くちやって。これ、もしかして・・・

振り返ってみるともうすぐそこまで迫っていた。奴を阻んでる箱はかなりぼろぼろですぐにでも壊れそうだった。

「聖奈さん・・・」

「嘘・・・全部倒したはずなのに」

「死角にいたんだ。多分箱が倒れた拍子に身動き出来るようになったんだと思う」

「ここまで来たのに・・・」

聖奈さんが口惜しげに、絶望の表情を浮かべながら呟く。まるで自分自身を責め立てるかのよう。しかし、僕も同じだ。もう少し周りに気を配っていれば。

「・・・・・・・・誰か・・・・居るのか？」

その時突如声が聞こえてきた。力尽きそうな弱々しい声。しかし、確かに聞こえてきた。そして僕は見つけた。声の主を。彼は暗闇の中で見落としていた棚の間の通路の先にいた。

「聖奈さん！一端あの人のところへ」

全力で走った。せめて少しでも奴から遠ざかるために。そして彼の元へたどり着いた。青い制服に帽子、彼は警察だった。

「大丈夫ですか！」

「・・・あ・・・あ・・・ダメみたいだな・・・その声は子供か・・・
・すまない・・・奴らに目を奪われてなにも・・・見えないんだ・・・」

悲痛そうな声とその傷だらけの体を見て聖奈さんが目を背ける。

当然だ。僕だって凄く苦しい。

「安心・・・しろ・・・奴らはこの狭いところには入ってこれない・・・だが・・・俺はもうすぐ・・・少年・・・これを・・・先ほど音がきこえたから・・・使い方は・・・分かっているね・・・」
冷たく弱々しいが強い思いのこもった手で渡されたのは今もとも重要なもの。拳銃と数発の弾丸。

「頼む・・・生きて・・・くれ・・・君の名前は・・・なんと
いうんだ・・・」

「のび太、野比のび太です」

「君が・・・のび太君か・・・息子からきいたことが・・・ある・・・
・・・心の優しい・・・少年だと・・・」

「あなたの名前は・・・」

「山下・・・拓・・・也・・・」

それが最後だった。ばさつという無機質な音共にその体が倒れ込んだ。

「山下さん・・・」

「・・・！野比君後ろ！」

聖奈さんの声に反応し、僕は後ろを向いた。なんとかこの通路に

入り込もうとしてくる化け物の姿がそこにはあった。

「山下さん。僕はドジで間抜けでダメな小学生です。でも・・・」
激鉄を起こし構える。今までたくさんの人を守ってきた銃を。まだ熱の残るこの銃を。奴の額に向ける。

「生き続けます。なにがあるうと必ず生き延びます。あなたの分まで、どんなに辛くとも、最期のその瞬間まで目を開いてやる！」
そして僕は引き金を引いた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3371o/>

ドラえもん のび太のバイオハザード

2010年11月5日22時42分発行